九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

沈思の人、迫野虔徳先生

高山, 倫明
九州大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1445858

出版情報：文獻探究. 51, pp.1-3, 2013-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

沈思の人、迫野虔徳先生

九州大学　高山倫明

初めてお目にかかったのは、先生が九大に助教授としてお戻りになった一九八〇年の四月、熊本からの引っ越しの手伝いに千早の宿舎へ出向いたときだった。私は他大学から修士課程に進学したばかりだったが、春日和男先生の『新編国語史概説』で受験勉強をしていたので執筆者のお一人である先生のお名前は存じ上げていた。それから三十余年、私は先生の背中を追いかけるようにして生きてきた。敬慕するが決して追いつけない背中だった。

先生の講義は、達筆な手書きのレジュメ数枚がそのつど配られ、それに沿って、一語一語を吟味するような、慎重な態度で静かに進行する。あるとき、僕はいつも学会で研究発表しているような気がするよと仰ったことがある。君たちが熱心に聴いてくれるからねと学生に花を持たせるような表現だったが、直前までレジュメに手を入れ、最新の考えをお話しになるのであるから、聴く側に熱が入るのは当然である。ほんとうに贅沢な授業だった。

先生は沈思の人だった。講義でも普通の会話でも、言葉を選びながら思慮深くお話しになった。会話が途切れて沈黙の時が流れても、気になさる風で

はなかった。こちらからの質問に対し、「んー」と短く低く仰ってから、しばし黙考に入られることも少なくなかった。私も最初は内心焦って言葉の接ぎ穂を探したりもしたが、やがて気まずさを感じなくなり、沈黙の時間を楽しめるほどになった。院生の時に何回か稲築町の方言調査にお供したことがある。のんびりとバスに揺られながらの行き帰り、そこに流れていた静かな時間が、今は無性に懐かしい。

教授の奥村三雄先生は対照的で、講義では学生に矢継ぎ早の質問が飛び、返答に窮すると間をおかずに二の矢、三の矢が飛んできた。会話も率先して展開されるので途切れることがなかった。だから、そんな両先生の会話は、端で伺っていると名状しがたい趣があった。迫野先生のちょっと長すぎるかとも思われる間合いに、端の方が固唾を飲むようなこともしばしばあったが、しかしご両人はまったく意に介していらっしゃらない。深い信頼関係があってのことだろう、それぞれがご自分のペースを守り、会話はいつしか変拍子のリズムを刻み始めるのだった。ともに囲碁の強者でいらっしゃったが、対局はどんな展開を見せたのだろう。私は全く不案内なのだが、分からないながらもちょっと興味がある。

さて、迫野先生は、日本語音韻史・表記史、そして方言史研究に精力を傾注された。とくに、日本各地に残された古文献から方言の歴史を再構しようとする一連の研究は先生の独擅場である。記念碑的な論文を厳選した『日本

の言語学　第六巻　方言』（一九七八年、大修館書店）にも再録された先生の処女論文「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」（『語文研究』二十二号、一九六六年）は、日本全国に大量に伝存する古文書・古記録類が言語史研究の資料にもなり得ることを示した画期的なものだった。集大成であり新村出賞にも輝いた『文献方言史研究』（一九九八年、清文堂）では、中央語をめぐる単線的な日本語史に代わり、地域言語の歴史をも含みこんだ日本列島の言語史が、周到に配置された諸論文によって提示されている。

先生の研究スタイルは、理屈に走ることもなければ、素朴な実例主義でもない、理論と実証が調和し、そこにいつも、ちょっとシャイなダンディズムが流れていた。あからさまな実益、即物的な社会貢献が大学に求められる昨今、研究者は沈思黙考の時間を奪われつつある。先生の謦咳に二度と接することが出来なくなった今、あらためて、失ったものの大きさを噛みしめている。

（たかやま　みちあき・九州大学教授）